

人間的力量育成のための導入教育の設計と試行

村松慶一^{*1}, 松居辰則^{*2}

^{*1} 早稲田大学グローバルエデュケーションセンター

^{*2} 早稲田大学人間科学学術院

Design and Trial of Introductory Education for Self-competence Development

Keiichi Muramatsu ^{*1}, Tatsunori Matsui^{*2}

^{*1} Global Education Center, Waseda University

^{*2} Faculty of Human Sciences, Waseda University

The Global Education Center of Waseda University offers an educational program for self-competence development as one of the academic skills that all students should acquire in common. In this educational area, students are required to select courses that form a cycle of theory and practice in accordance with their interests. In this presentation, we report on an introductory education course that was designed on a trial basis to help students clarify the purpose and reasons for training their own abilities in order to select the course. As a result, the learning goal that students reaffirm the purpose and reason for self-competence development was achieved. However, there was considerable room for improvement in learning activities that promote awareness of student's own assumptions.

キーワード: 人間的力量育成, 導入教育, 認知バイアス, 思い込み, ディベート

1. はじめに

世界のグローバル化により先進国では知識、情報、サービスをめぐる絶え間ない創造が経済発展の基盤となっており、知識や人材は国境を越えて移動し、新たな知識は生み出され、技術革新が加速度的に繰り返されている⁽¹⁾。また、フラットなヒエラルキーと自己管理が、強いヒエラルキーと外部からの管理にとって代わり、時間や空間に関する仕事の境界があいまいになってきた結果、教科横断的で学際的なコミュニケーション能力、協同や自己組織化や自己管理のための能力、異文化間能力、柔軟性、機動性、語学力、そして異なる生活圏を調整する能力が職業上の課題を遂行するための重要な前提条件となってきた⁽²⁾。

こうした社会的背景から、早稲田大学グローバルエデュケーションセンター（以下、GEC）では、全ての学生が共通に身に着けるべき学術的スキルのひとつとして、人間的力量育成（self-competence development）の教育プログラムを提供している。早稲田大学の建学の理念のひとつである「模範国民の造就」は、グローバリゼーションが進展する現代においては豊かな人間性を持った「地球市民の育成」と言い換えることができ、その基盤を形成する取り組みのひとつが人間的力量育成であるといえる。

本報告では、人間的力量育成のために試行的に設計した導入科目について述べる。具体的には、人間的力量の考え方を概説し、当該授業の設計コンセプト、教育プログラム化について説明した後に授業の実践と評

価についても述べる。

2. 人間的力量の考え方

人間的力量という概念は、早稲田大学の教育・研究ポリシーを表現する上で重要であり、次のように説明される：「早稲田大学の卒業生が地球上のどのような地域に行っても、そこに溶け込みサバイヴし、その地域社会の価値観を学んで、その結果として自分の故郷の地域社会でも、または行った先の地域社会や国に貢献する場合でもよし、または自分の国やその国の民間企業に貢献するのもよし、さらに国際機関・国際企業などを通して地球上の大きな地域（region）または国際社会に貢献すること、どの分野であっても、周囲の人々の幸福の実現を目指す強い意志をもち、多様な価値観や文化的背景をもった人々を一つにまとめ上げこれをリードする力量」⁽³⁾。

人間的力量には問題解決力、コミュニケーション力など、さまざまな能力が含まれていると考えられるが、冒頭の社会的背景を鑑みるに、self-competence が大きな位置を占めると考えられる。この self-competence とは、世間一般、仕事、自己に対する態度を指し、意欲、勤勉さ、正確さ、献身といった古典的な仕事上の美德に加えて、自尊心、柔軟性、責任感といったより一般的な特性も含まれる⁽²⁾。早稲田大学第 17 代総長による、答えのない問題に挑戦する「たくましい知性」を鍛え、多様な価値観を持つ人々に敬意をもって接し理解する「しなやかな感性」を育む⁽⁴⁾という教育方針は、人間的力量を備えたグローバル・リーダーの態度を表現したものとも捉えることができよう。

3. 授業設計のコンセプト

GEC での「たくましい知性」と「しなやかな感性」を育成の取り組みは、正課の科目を起点として正課外の活動まで含めた理論と実践の往還を目指すものである。具体的には、正課の人間的力量科目としてキャリア形成、ダイバーシティ、ボランティア、地域連携、リーダーシップ、ビジネス創出の科目群が GEC によって提供されており、正課外の活動としては平山郁夫

記念ボランティアセンター、キャリアセンター、異文化交流センターが主管するワークショップ、インターンシップ、イベントなどが実践の場として用意されている。（注：当然ながら、人間的力量科目以外の正課の科目および公認サークルや体育局などの課外活動も理論と実践を学ぶ場ではあるが、本報告では人間的力量育成の教育プログラムに焦点を当てるためあえて言及していない。）

正課の科目と正課外の活動を円滑に接続し、理論と実践の往還を実現するためには、人間的力量科目の共通性や個別性について整理する必要がある。その上で、学生自身が伸ばしたい人間的力量ないし self-competence を自ら認識することも必要であると考えられる。これらを導入教育として実施することによって、修得の必要な正課の科目と正課外の活動を学生が自ら選択できるようになると考えられる。

先述のように self-competence は世間一般、仕事、自己に対する態度を指すものであるため、そういった態度に対する学生自身の認識あるいは再認識を促すことが導入教育の授業内容としてふさわしいと考えられる。特に、教科書や参考書に載っている問題ではなく、正解のない問題に取り組むことに慣れていない初年次の学生に向けて、世界に対する認識を捉え直す機会を作ることが重要である。従来からの世界に対する認識に誤りがあるかもしれないということに、学生自身が気づくことが授業設計のコンセプトである。

4. 教育プログラム化

前述の授業設計のコンセプトを踏まえ、「人間的力量ファンダメンタル」「人間的力量学基礎 1」「人間的力量学基礎 2」「人間的力量学応用 1」「人間的力量学応用 2」という 5 科目からなる教育プログラムを作成した。（ただし、「人間的力量学基礎 1」「人間的力量学基礎 2」「人間的力量学応用 1」「人間的力量学応用 2」については後に基礎と応用が統合され、「人間的力量学 1」「人間的力量学 2」となっている。）

「人間的力量ファンダメンタル」は人間的力量科目との接続性を志向して共通性や個別性について言及するものであり、「人間的力量学」は世界についての知識

を整理する方法について演習するものである。どちらも従来からの世界に対する認識に誤りがあるかもしれないということに、学生自身が気づくというコンセプトに基づいて授業が設計されているが、本報告では他の人間的力量科目との直接的な関係性から「人間的力量ファンダメンタル」について詳述する。

4.1 学習目標と学習評価

「人間的力量ファンダメンタル」では、人間的力量科目群に通底するマインドを学び、学生自身が「たくましい知性」と「しなやかな感性」を鍛える目的と理由を改めて確認することが学習目標として設定された。学生の成績は、学期末に出題されるレポートの考察の内容から、学習目標に対する到達度を評価（60%）し、毎回出題する小課題から、授業内容の理解度および取り組み態度を評価（40%）することとした。

4.2 学習活動

授業全体の構成は、初回到授業の狙いと構成を説明するイントロダクション、2回目から4回目までに関連トピックの解説、5回目から7回目までのディベート形式のディスカッション、最終回にまとめとして授業の振り返りを行うものである。

4.2.1 関連トピックの解説

世界に対する認識を捉え直す機会を作ることを念頭に、人間の認知能力に関するトピックを設定した。具体的には、人間のもつ原初的能力（2回目）、社会において求められる能力（3回目）、求められる能力のギャップ（4回目）である。人類が進化過程で獲得した認知能力を出発点とし、現代社会で求められている職務上の能力を引き合いに出すことで、それらの能力のギャップについて解説する流れである。能力のギャップとしては認知バイアスの話題を取り上げ、人類が獲得した認知能力の一部は現代社会の環境下では不都合を起し得ることの理解を通して、思い込みによって世界を誤って認識してしまうことについて学生の気づきを促す狙いがある。

人間のもつ原初的能力については書籍『サピエンス全史』^(5, 6)を参照し、言語体系の獲得や原始的信仰の

獲得を取り上げるとともに、感性の進化的起源に関する仮説を取り上げる。社会において求められる能力については、社会人基礎力について取り上げる。求められる能力のギャップについては、言語能力を発揮することによって記憶が阻害されたり思考が停滞したりする事例を紹介するとともに書籍『Factfulness』⁽⁷⁾で思い込みとして紹介される認知バイアスを取り上げる。

4.2.2 ディベート形式のディスカッション

身近な話題における思い込みを体験し気づきを得る目的で、それぞれの人間的力量科目に関連する論題を設定した。各科目とディベート論題を表1に示す。ただし、地域連携の科目については教員の都合により設定されていない。これらの論題は「正解のない問題」を念頭に各科目の担当教員との協議によって作成された。一般的な意見としては肯定とも否定ともつかないような論題とすることで、特定の文脈に依存した主張が出されやすくなることを意図している。これによって、ディスカッションの中で思い込みが生じやすくなっていると考えられる。

表 1 各科目に関連するディベート論題

科目	論題
キャリア形成	具体的なキャリア目標を持つべきか否か
ダイバーシティ	「みんなちがって、みんないい」という価値観は、競争社会において受容可能か否か
ボランティア	ボランティアは自己満足か、否か
リーダーシップ	リーダーシップをとるのは牽引力のある人(たち)だけであるべきか
ビジネス創出	ビジネス創出は大学や企業等のシーズに基づくべきか否か

学生は2名から4名のグループに分けられ、事前準備として各論題の肯定・否定の両者について、立論：論題に対する意見、反論：立論に対して想定される意見、主張：反論に対して反論した最終的な意見、の3

点を 30 分程度で作成する。その上で、肯定側および否定側の立論、質疑、反駁をそれぞれ 2 分ずつ行うフォーマットでディベートを実施する。

所定の論題についてディスカッションが終わった後に、各自でディスカッションの中で気づいた思い込みについてまとめ、小課題として提出することとする。

4.2.3 授業の振り返り

ディベート形式のディスカッションについては、各科目の担当教員が論題に対応する形で作成したビデオメッセージを視聴することで振り返りを行う。このビデオメッセージは、論題についての解説とともに各科目との接続性について説明する内容となっており、引き続き学生にそれらの科目の受講を促す意図がある。

また、各論題のディスカッションに想定される思い込みについて、書籍『Factfulness』⁽⁷⁾に紹介される認知バイアスに基づいて解説を行う。これにより、各科目を受講する中で直面する可能性のある **self-competence** の固有性を明確にする意図がある。例えば、キャリア形成科目では、何もしなくてもキャリアは続いていくという思い込みがあり、実際には“直線的な”キャリア進路はないかもしれないということが「直線本能」と呼ばれる認知バイアスとして説明される。さらに、人間の認知能力に関するトピックを振り返りながら、「自分自身の文脈で世界と関わっていく」態度が人間的な力量育成科目の共通性として説明される。これは、ディスカッションを通して特定の文脈に依存した主張とそれに対する思い込みを体験することと関連しているとともに、各科目で扱う課題を解決するために当事者意識が不可欠であることに由来している。

5. 実践と評価

2021 年度秋クォータおよび冬クォータに全学向けに「人間的な力量ファンダメンタル」を実施した。この科目は初年次向けを想定して設計されているが、受講に際して制限を設けなかったため、2017 年入学から 2021 年入学の学生が受講し、30 名が最終レポートを提出した。最終レポートの課題内容は次の通りであった：この講義で解説した内容やディスカッションでの気づきを通して、あなたが自分にとっての「たくまし

い知性」と「しなやかな感性」を鍛える目的と理由を説明しなさい。その際に、受講前と受講後の自身のマインドの変化について具体的に言及すること。

まず、「たくましい知性」と「しなやかな感性」を鍛える目的と理由については、例えば「現代社会が求める人材になるため」というような目的と、動機として理解される「現代社会が求める人材になりたい」というような理由が明確に分離されていない回答が多く見られた。そのため、ここでは両者とも目的として解釈することとした。その結果、明確に文意を読み取ることでできなかった 2 件を除いて、学生自身にとっての目的に関する回答が得られた。このうち、人間像に言及する回答がほとんどを占めていた。例えば「考える力とチームで働く力をもった、現代社会が求める人材になるため」「リーダーシップを発揮し、社会を引っ張っていく存在になりたいから」というように、社会人としての理想像を描くものである。一方で、少数ではあったが「自身で情報の取捨選択、価値判断ができるようになるため」のように具体的な能力について言及するものがみられた。

人間像についての言及が多かったことについては、社会人として求められる能力が複数あり、総合的な能力の学修が必要であると学生たちが考えているため、それらの能力を総合した人物像の表現が用いられたと推察される。学習目標である、学生自身が「たくましい知性」と「しなやかな感性」を鍛える目的と理由を改めて確認することは達成されていると考えられるが、抽象的な人間像だけではなく、より具体的な能力にも言及できるような授業の改善も検討する必要がある。

次に、受講前と受講後の自身のマインドの変化については、思い込みないし認知バイアスに気づいた旨の回答が約半数であった。例えば「私たちは様々な「思い込み」に縛られ生きているなど実感した」「“何で自分はそう考えたのか”と改めて考えたり“他の人はどうこの段階で違う考えになったのか”と考えていくようになりました」というように、ディベート形式のディスカッションを通して、自身の思い込みを自覚するようになったことがうかがえる。

その一方で、残りの半数は「正解のない問題」に対

して思考を続けることの重要性について、あるいは「たくましい知性」や「しなやかな感性」を鍛え、発揮することの重要性についての回答であった。ディベートの論題が「正解のない問題」を念頭に置いたものであったため、ディスカッションを通してそれらの認識を強めることになったものと推察される。授業設計のコンセプトである、従来からの世界に対する認識に誤りがあるかもしれないことに気づく、すなわち思い込み気づくという点については、より達成度を高めるべく学習活動を見直す必要があると考えられる。例えば、ディベート形式のディスカッションの事前準備であった、立論、反論、主張の作成は、セルフ・ディベートの方法のひとつであり、論題についての多面的な理解を深めるものである。この作業に重点を置き、作成された立論、反論、主張を公表し他者の意見と比較することで、自身の思い込みについての気づきを促すような学習活動の改善が考えられる。

6. おわりに

本報告では、人間的力量育成のために設計した導入科目の試行について述べた。早稲田大学の教育・研究ポリシーを表現する上で重要な人間的力量をある種の **self-competence** として捉え、従来からの世界に対する認識に誤りがあるかもしれないことに気づくことを授業設計のコンセプトとして教育プログラムを作成した。その一部である「人間的力量ファンダメンタル」の授業において、人間の認知能力に関する解説とディベート形式のディスカッションを実施した結果、学生自身が「たくましい知性」と「しなやかな感性」を鍛える目的と理由を改めて確認するという学習目標は達成されたが、授業設計のコンセプトの実践には改善の余地が見いだされた。

人間の認知能力に関する解説として、人類が進化の過程で獲得した認知能力を起点にしたものはユニークであるとともに学生にとってインパクト残すものであったと考えられる。今後はセルフ・ディベートの方法に重点を置いた学習活動を実施することで、授業設計のコンセプトについても十分な実践を目指す。また、本報告では言及しなかった、正課の科目と正課外の活

動を円滑に接続するという観点からも評価を行う予定である。それに際して、人間的力量に関する概念を整理するためのオントロジーを構築することで、正課と正課外の科目の概念レベルでの統合を計画している。その上に正課の科目群と正課外の活動群が有機的に結び付けられることで、理論と実践の往還が実現される。

謝辞

早稲田大学グローバルエデュケーションセンター 人間的力量教育部門の先生方には、授業の設計や進め方について有益な助言をいただきました。

参考文献

- (1) 松尾知明: “知識社会とコンピテンシー概念を考える— OECD 国際教育指標 (INES) 事業における理論的展開を中心に—”, 教育学研究, Vol.83, No.2, pp.154-166 (2016)
- (2) Schaeper, H.: “Development of competencies and teaching–learning arrangements in higher education: findings from Germany”, *Studies in Higher Education*, Vol.34, No.6, pp.677-697 (2009)
- (3) 所長挨拶 - 早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター,
<https://www.waseda.jp/inst/wavoc/about/message/>
(2022年4月13日確認)
- (4) 総長挨拶 - 早稲田大学 Waseda Vision 150
<https://www.waseda.jp/inst/vision150/about/message>
(2022年4月13日確認)
- (5) ユヴァル・ノア・ハラリ, 柴田裕之(訳): “サピエンス全史 (上) 文明の構造と人類の幸福”, 河出書房新社, 東京 (2016)
- (6) ユヴァル・ノア・ハラリ, 柴田裕之(訳): “サピエンス全史 (下) 文明の構造と人類の幸福”, 河出書房新社, 東京 (2016)
- (7) ハンス・ロスリング, オーラ・ロスリング, アンナ・ロスリング・ロンランド, 上杉周作(訳), 関美和(訳): “Factfulness: 10 の思い込みを乗り越え, データを基に世界を正しく見る習慣”, 日経 BP, 東京 (2019)